青森県　平川市立小和森小学校　　2年生　25名

葛西　美智子　先生

テーマ　【凛々子って人？トマト？】

■　活動のきっかけ:

昨年、近隣の柏木小学校で行われた５年生の家庭科の研究授業（※）で、冷凍した「凛々子」の実を使った調理実習が行われた。「りりこって何？どんな味？」と興味を持ち、今年度は本校でも２年生の生活科単元「きらきら野菜を作りたいな」で「凛々子」を栽培することにした。

※2008 年 10 月 30 日　平川市立柏木小学校家庭科研究授業の様子はウェブサイトに公開しています。
http://www.c-player.com/ac67193/thread/1100075222615

■　活動のねらい:

○　野菜を栽培して、成長や収穫の喜びを体得し、食に関する関心や意欲を持たせる。

○　国語科の作文学習をいかして、野菜の成長や自分の活動を振り返りながら作文を書き、お世話になった人へ感謝する心を育てる。

■　活動の流れ:

①子どもたちと「凛々子」との出会い（5 月 21 日）

届いた苗に水と光をたっぷりと与えた後、再び箱に入れ、箱ごと子どもたちの前に置いた。「何の苗だと思う？」「“りりこ”という名前がついています」と声をかけると「わぁ～！毛がたくさんあるよ。どうして？」「トマトのにおいがする！」などの歓声が上がり、子どもたちの興味や関心を刺激する楽しい出会いの場となった。

その後、加工用で市販されていない珍しい品種であることや、児童向けホームページ「りりこ図鑑」（http://www.kagome.co.jp/tomato-nae/）をプリントしたものを使って子どもたちと収穫までの作業の流れを確認してから苗を植えた。土は、ＪＡの方がトマト用の肥料が入った培養土を無償で提供してくださった。

②地域のサポートを受けながら栽培

追肥の仕方や７月の長雨による日照不足など、栽培について心配なことが多かったため、近隣の柏木小学校に生育状況を聞いたり、ＪＡの野菜指導員の方に芽かき等の育て方を教えてもらった。（写真下）

また、保護者の協力のもとで夏休みには鉢を家庭へ持ち帰り育て、２学期が始まると再び学校で鉢栽培を続けた。

③郷土料理を応用したおやつ作り（9 月 15 日）

津軽では傷のついたリンゴをジャムにして冷凍しておき、おやつ作りなどに使う。これを応用して青い未熟のトマトもジャムにしてみんなで味わうことにした。緑色のジャムは見た目においしくなさそうなので、ギョーザの皮で包んで油で揚げたお菓子に、赤く熟したトマトはトマトソースにしてギョーザピザを作った。簡単なおやつ作りを通して、自分たちが育てたトマトを全員で調理し、おいしく味わうことができた。

④リリコさようなら（10 月 21 日）

「凛々子」を鉢から出し、これまで体を支えてきた根や茎を観察しながら、最後の観察シートを記入した（右）。枝にはまだ青い実がついていたので、トマトピクルスにして保存し、３学期に味わう予定である。

⑤国語科で感謝の作文を書く

これまでの栽培活動を振り返りながら、野菜作りでお世話になった人への感謝の気持ちを作文で表現した。

※代表作品として大川実桜さんの作文「カゴメトマトのみなさんへ」をウェブサイトに公開しています。

http://www.c-player.com/sp/KAGOME/pdf/kowamori.pdf

■ 活動によって得られた成果：

○ 小さく弱々しい「凛々子」の苗が、北国でも無事に育ち、ねらいに沿った活動ができるかと栽培当初は不安だったが、その不安があったからこそ、子どもたちは常に「凛々子」を気にかけ、生育不良や収穫に一喜一憂し、トマトの生命力を実感することができた。

○ 簡単なおやつ作りで「凛々子」をおいしく味わったことで、収穫を喜んだだけでなく、家庭でも作るなど、食への関心や意欲が大いに高まった。

○ 「凛々子」の一生を振り返って書いた作文には、命を見守る子どもたちの温かい思いが素直に書かれており、物事を見つめる目、感じる心、考える力が育った。「凛々子」を人のように慈しみ育てたことで、子どもたちの心も育った。

■ モグモからのメッセージ：

定植が遅く、夏が短い青森でも、みんなの愛情と地域の協力によってたくさんの実が収穫できたね。完熟した真っ赤な実も、未熟な青い実も、ギョーザの皮を使えば２種類のおやつに大変身！みんなにもオススメのメニューだよ！
苗との出会いが、その後の活動意欲につながる重要なポイントになっているね。観察記録や作文には、みんなの「凛々子」栽培への情熱がよ～く表れているよ。